

kabugami.jp SYSTEM OVERVIEW ・ 2026.08.30 ・ R1

kabugami.jp

個人の日本株研究から、AI協働型リサーチ基盤へ

システム全体像・構築状況・長期価値レポート

基準日：2026年8月30日

kabugami.jp

本レポートは、[kabugami.jp](#)を理解したいすべての関係者と公開読者に向けた資料です。

[kabugami.jp](#)とは何か、なぜ現在の構造になったのか、各機能がどう連携するのか、現在どこまで構築されているのか、成熟後にどのような姿を目指すのかを説明します。

公開のシステム説明・長期記録であり、日本株研究に関する記述は特定銘柄の売買を推奨するものではありません。

はじめてkabugami.jpを知る方へ

Webサイトだけを見ると、kabugami.jpは「日本株のリサーチサイト」に見えるかもしれませんが。内部の開発状況だけを見ると、多数のAIプロジェクトやデータ基盤、プログラムの集合体に見えるかもしれません。

どちらも一部は正しいのですが、全体像ではありません。

kabugami.jpが長く向き合ってきた問いは、実は非常にシンプルです。日本の上場企業を、より深く、より現実に即して、継続的に理解し、その理解を毎回ゼロからやり直さず、長期的に蓄積していくにはどうすればよいか。

出発点は、人間の研究習慣でした。会社四季報を読む。企業資料を追う。長期チャートを見る。条件を決めて銘柄を絞る。実際の投資経験を振り返る。そこにAIが深く参加するようになると、研究の射程は急速に広がりました。同時に、新しい問題も見えてきました。

AIは大量の文章を書けます。しかし文章量と理解の深さは同じではありません。複数の研究方向は互いに重複します。重要な発見が、整理や要約の段階で消えることがあります。新しいスコアリング方法が研究そのものを逆に縛ることもあります。Webサイトは読みやすくなければなりません。UIの都合で研究を単純化してはいけません。AIモデルもツールもいつか変わります。記憶がチャットの中にしかなければ、数年分の成長が一度に失われる可能性があります。

現在のkabugami.jpは、こうした現実の問題に一つずつ対処した結果として形成されてきました。

今では単なる「銘柄研究の方法」ではありません。市場の事実、能動的な発見、複数の研究役割、証拠の統合、比較評価、レポート表現、知識辞典、ユーザー接点、研究流通、全体統治、歴史記憶、災害復旧までを含む、一つのリサーチ基盤へと進化しつつあります。

kabugami.jpの特徴は、AIを使っていること自体ではありません。むしろ、AIを「組織化」し始めている点にあります。自由に発見するAIと、厳密に統合するAIを分ける。内部研究と公開表現を分ける。スコアと研究を分ける。そして各機能が独立して進化できるようにする。これによって、どこか一つを改善するたびに全体を作り直す必要を減らしていきます。

kabugami.jp自身を「研究対象」として書く

本レポートでは、意図的に一つの編集姿勢を採っています。kabugami.jpが上場企業を研究するときと同じように、kabugami.jp自身を研究対象として扱うという姿勢です。

kabugami.jpやJNJLEEが上場会社であるという意味ではありません。同じ研究態度を使うという意味です。まずアイデンティティと歴史を確認し、価値を生む仕組みを説明し、実証済みの能力と構築途中のものを分ける。依存関係、弱点、反証、未知も残し、何が起きれば現在の評価を変えるべきかまで考えます。

本資料は、読者とkabugami.jpの特定の関係を前提にしません。すべての関係者と公開市場に向けた、長期的なシステム記録です。

重要ガイド | 10分だけ読むなら

まず一つだけ覚えてください

kabugami.jpは、単なる銘柄選定ソフトではありません。

日本市場の新しい事実を継続的に取り込み、研究対象を能動的に発見し、複数の視点で検討し、証拠・反証・未解決点を保存し、企業ごとの長期リサーチ記録を育てながら、その複雑な研究を一般の読者にも届く形に変換していくシステムを目指しています。

六つの能力層で見るkabugami.jp

第1層 | 市場の事実

価格、履歴、企業、マーケットの変化を、まず事実として揃える。

第2層 | 発見と研究

日本市場全体から研究すべき対象を見つけ、企業・業界・価格構造を複数の研究役割で掘り下げる。

第3層 | 統合と判断

多数の発見、証拠、反証、未知、結論を、後から再利用できる研究資産に変える。

第4層 | プロダクト表現

研究をレポート、チャート、用語辞典、Web体験に変える。

第5層 | 流通と価値

研究を「公開して読まれて終わり」にせず、発見、引用、保存、共有、議論へつなげる。

第6層 | 統治・記憶・復旧

複数のAIと複数システムが長期運用されても、方向を失わず、記憶を失わず、何かが壊れても再構築できるようにする。

1章だけ読むなら

第13章「ある企業がkabugami.jpに入ったとき、研究はどのように進むのか」をご覧ください。

個別モジュールの説明をやめ、1社の上場企業が発見され、研究され、疑われ、統合され、評価され、公開され、最終的に長期知識へ変わるまでを一度に追います。

読み方は三通りあります

「結局これは何なのか」を知りたい方：第1章 → 第3章 → 第13章 → 第15章。

「普通のAI株式サイトと何が違うのか」を知りたい方：第2章 → 第5章 → 第6章 → 第11章 → 第13章。

「長期価値とリスク」を判断したい方：第1章 → 第14章 → 第15章 → 第16章 → 第17章。

目次

01 kabugami.jpは現在何なのか	5
02 なぜ現在の姿になったのか	6
03 一枚で見るkabugami.jpの全体構造	8
04 第1層：市場事実基盤	10
05 第2層：研究と能動的発見	11
06 第3層：研究統合・証拠中枢	13
07 総合評価・比較システム	15
08 研究をプロダクトへ：レポート・図表・辞典・ユーザー入口	16
09 研究流通と価値循環	18
10 Web・物語・人格：なぜkabugami.jpは研究バックエンドだけではないのか	19
11 全体ガバナンスと調整中枢	20
12 長期記憶と災害復旧	21
13 一社がkabugami.jpに入ったとき、完全研究は実際にどう進むのか	22
14 2026年8月30日時点で、どこまでできているのか	30
15 すべてが成熟したとき、kabugami.jpは何になるのか	32
16 何が長期価値になり得るのか	33
17 現在のリスク・制約・未解決課題	35
18 結語：一人の研究習慣から、引き継げるシステムへ	37

01 | kabugami.jpは現在何なのか

現在のkabugami.jpを一言で表すなら、次のようになります。

日本の上場企業を対象に、人間と複数のAIが協働し、市場の事実から長期的な知識資産までを一貫して扱うリサーチ基盤。

研究だけではなく、プロダクトも含みます。AIの自由な思考もあれば、厳密な証拠管理もあります。今この企業を研究すべきかを考えるだけでなく、数年後に「当時なぜその判断をしたのか」を説明できることも重視します。

外部ユーザーが触れるのは、Webサイト、レポート、チャート、概念解説、そして将来のAI対話機能です。その背後では、市場事実、企業研究、価格構造研究、AI自由研究、研究統合、スコア、公開、辞典、統治、歴史復旧といった能力が、できるだけ独立して動けるよう設計されています。

この「分離」は重要です。

銘柄発見、企業研究、チャート分析、スコアリング、文章作成、Web表示がすべて一体化していると、どこか一つの方法を更新するだけで全体を作り直す必要があります。kabugami.jpでは、技術研究だけを進化させてもファンダメンタル研究を壊さない。スコアを更新しても過去のレポートを書き換えない。UIを変えても研究事実を変えない。将来AIモデルを交換しても、蓄積した研究や歴史を引き継げる。その状態を目指しています。

つまりkabugami.jpは、「一つの作品」から「長期的に進化できるプラットフォーム」へ移行している段階です。

02 | なぜ現在の姿になったのか

kabugami.jpは、最初から巨大な構想図を描いて作ったシステムではありません。多くの機能は、実際の研究で問題が起きた結果として必要になりました。

2.1 指標理解から、再現可能な研究へ

現在回収できている歴史資料では、研究の前史は少なくとも2023年まで遡れます。MACDの計算式、パラメータ、プログラム実装を掘り下げ、一方、会社四季報の情報を繰り返し使える条件へ変換する試みもありました。

「チャートを見て何となく良い」から、「同じ条件をもう一度検証できる」方向への変化です。

2.2 数銘柄から、日本市場全体へ

2024年には、東京市場全体を母集団とし、複数の時間軸で段階的に絞り込む発想が確認できます。重要なのは、指標が一つ増えたことではありません。

視点が「今日はどの銘柄を見るか」から、「日本市場全体の中で、今どこに研究価値があるか」へ広がったことです。

2.3 個人ノートから、正式な研究プロダクトへ

2025年には、月次レポートや単一企業の深掘り分析が実際の成果物として存在していました。マクロ、市場、業界、企業、バリュエーション、長期チャート、リスク管理が同じレポートに入るようになります。

同時に、商品としての境界も議論されました。情報整理とは何か。研究意見とは何か。どこまで公開すべきか。何を投資推奨と誤認させてはいけないか。研究のプロダクト化が、内容と表現の両面で進み始めました。

2.4 レポートから、kabugami.jpのWebとIPへ

2026年1月には、『株神降臨』が「日本企業を一社ずつ物語として読む」というアイデアから、Webサイト、登場人物、世界観、WordPress上の実際のプロダクトへ発展していきました。

ここで重要な認識が生まれます。研究が正しいことと、人が使いたいプロダクトであることは別問題である。

2.5 一つのAIから、複数のAI役割へ

AIの関与が深くなると、新しい失敗が見えました。

一つのAIが、自由な発見、体系的な調査、統合、採点、文章化まで全部担当すると、表面上は整ったレポートを作れる一方で、研究が徐々に「フォームを埋める作業」に近づく危険があります。

そこでkabugami.jpでは、自由に探索するAIと、厳密に研究事実を統合するAIを意図的に分離してきました。共通するのは真実性の最低基準であり、思考順序まで同じにする必要はありません。

2.6 一体型から、独立進化できる構造へ

2026年8月の大きな変化は、従来つながり過ぎていた能力をさらに分けたことです。

市場の事実とは技術判断ではない。技術判断は公開チャートではない。スコアは研究ではない。レポートの章立ては研究の思考順序ではない。UIは研究内容を逆に決めてはいけない。

この分離によって、各能力は今後より独立して進化できるようになります。

03 | 一枚で見るkabugami.jpの全体構造

kabugami.jp全体は、「現実」から「長期知識」までをつなぐ一本の流れとして理解できます。

FROM REALITY TO DURABLE RESEARCH ASSET

01

市場の事実

実際の価格・企業情報・歴史的経路



02

発見とリサーチ

全市場探索・ファンダメンタル・価格構造・AI自由研究



03

統合と判断

証拠・反証・矛盾・未知・因果関係



04

比較と長期アーカイブ

Scoreは一つの視点・過去版を保存



05

プロダクト表現

レポート・チャート・辞典・Gateway・AI入口



06

流通と価値

閲覧・引用・コレクション・共有・議論

全体ガバナンスと調整

複数システムを長期協働させる

長期記憶と災害復旧

成長理由と再構築能力を失わない

日本市場・上場企業という現実世界



市場事実基盤



能動的発見と複数の研究役割



研究統合・証拠中枢

↓

総合評価・比較

↓

レポート、チャート、辞典、ユーザー体験

↓

発見、引用、保存、共有、議論、将来の価値流通

そして、この全体を横断する二つの機能があります。

全体統治・調整中枢は、「どのプロジェクトが何をしているか、何が止まっているか、何を続けるべきか、何を今は動かしてはいけないか」を管理します。

長期記憶・災害復旧は、「なぜ今の形になったのか、何かが失われたときどう再構築するか」を管理します。

どちらも銘柄研究そのものはしません。しかし、この二つがなければ、複数AIによる研究組織は長期的に維持しにくくなります。

04 | 第1層：市場事実基盤

投資研究で見落とされやすいのは、事実が揃う前に解釈を始めてしまうことです。

kabugami.jpでは、そのために「市場の事実」を一つの独立した層として扱っています。内部的には複数の機能がありますが、外部からは三つに分けて理解できます。

4.1 全時間軸マーケットマップ機能

目的は「きれいなチャートを描くこと」ではありません。

人間とAIが、同じ企業の同じ価格履歴を、日・週・月など複数の時間軸で一貫して観察できることが重要です。単一のスクリーンショットではなく、上場後の長期的な価格の生命史として見るための観察基盤です。

研究用チャートと公開チャートも区別します。研究者が必要とする深度と、一般読者に提示すべき情報量は同じではありません。

4.2 日本市場事実基盤

日本上場企業の価格、出来高、調整後価格、コーポレートアクション、対象銘柄群などを、追跡可能で更新可能な事実として扱うための基盤です。

これはまだ構築・監査の途中です。プロトタイプデータは研究実験に使えますが、出所、利用許諾、品質が確認できない段階で「正式な長期市場事実」と呼ばない、という原則を置いています。

4.3 日本市場全体の機会発見システム

市場事実が整えば、研究は「人が銘柄コードを入力するまで待つ」必要がなくなります。

日本の上場市場全体から、価格構造の変化、評価の歪み、品質との組み合わせ、異常な変化、研究すべき盲点などを能動的に拾い、研究層へ送る方向を目指しています。

ここでの役割は「発見」であって、「自動売買」ではありません。研究視野を広げるための入口です。

05 | 第2層：研究と能動的発見

kabugami.jpの研究層では、一つのAIにすべてを任せるのではなく、複数の独立した研究役割を持たせる方向へ進んでいます。

5.1 企業ファンダメンタル深掘り研究

企業が本当にどう稼いでいるかを調べます。

何を売っているのか。誰が支払うのか。なぜ顧客は離れにくいのか。どこに重要な供給依存があるのか。業界内の立場はどうか。利益が現金に変わっているか。経営陣は株主資本をどう配分しているか。現在の株価には何が織り込まれているか。そして、どの事実が現在の投資判断を崩すのか。

目的は、会社資料を要約することではなく、事実を因果関係へ組み立てることです。

5.2 価格・市場構造研究

この研究は価格履歴そのものを対象にします。

単一の指標、一回のブレイクアウト、一回のゴールデンクロスを結論にはしません。そうしたものは観察のためのセンサーです。

現在の研究では、古い価格状態が本当に支配力を失ったのか、新しい状態が回帰や滞留のテストに耐えたのか、複数時間軸がどのように整合しているか、価格の通ってきた経路がどのような記憶を残しているか、といった点を重視します。

公開時には、読者が結論を理解するための証拠は出します。一方で、内部手法を逆算できる具体的な閾値、検出組み合わせ、再帰ロジックは公開しません。

5.3 AI自由研究レーン

これはkabugami.jpの中でも非常に重要な能力です。

すべてのAI研究を最初から固定された章やチェックリストへ押し込むと、AIは「ルールを守ること」には非常に上手になりますが、誰も想定していなかった問いを見つける力が落ちる可能性があります。

そこで独立した自由研究レーンを残します。

顧客を追う。供給者を追う。競合を追う。会計上の違和感を追う。政策の伝播を追う。買収の経済性を追う。既存の枠組みに名前のない問いでも、投資判断を変える可能性があれば掘る。

自由であること自体が目的ではありません。**発見能力を守ることが目的です。**

5.4 厳密な研究レーン

自由研究とは別に、重要な盲点を体系的に埋める研究レーンがあります。

企業、業界、財務、ガバナンス、バリュエーション、リスク、価格構造などが、研究者の好みによって長期的に無視されないようにする役割です。

kabugami.jpは、この二つを意図的に同じ思考手順へ統合しません。

同じ事実基準、異なる頭脳。

06 | 第3層：研究統合・証拠中枢

AIの危険な失敗は、必ずしも明らかな虚偽だけではありません。

むしろ実務では、調査で見つけた重要な内容が最終要約で半分消える、面白い仮説と強く検証された事実が同じ強さで書かれる、矛盾が文章の流れを整えるために消される、といった「静かな損失」が問題になります。

kabugami.jpの研究統合・証拠中枢は、そのために存在します。

内部ではCanonicalと呼ばれますが、一般の読者には、**研究機関の中央記録庫、証拠管理部門、統合編集部**を合わせたものと考えると分かりやすいでしょう。

単にAIの文章を連結するわけではありません。複数の種類の研究要素を別々に扱います。たとえば：

- ・研究上の発見；
- ・事実とその出所；
- ・支持証拠と反証；
- ・競合する説明；
- ・重要だが未解決の問い；
- ・因果メカニズム；
- ・現時点の総合判断と、それを覆す条件；
- ・それらをスコア、レポート、公開表現へどう渡すか。

ここでは、「何を管理しているか」までは説明します。しかし「具体的にどう管理するか」は公開しません。内部の状態構造、収束方法、ルーティング、検証ロジック、再現可能な研究ノウハウはkabugami.jpの研究資産だからです。

この層の重要原則は一つです。

下流は上流の研究を整理し、圧縮し、表現することはできる。しかし、上流が何を発見してよいかを逆に決めてはいけない。

レポートに固定章があるからといって、現実が固定章でできているわけではありません。スコアに八つの軸があるからといって、研究が八つの軸だけを見ればよいわけでもありません。UIが短いからといって、内部研究を短くしてはいけません。

2026年8月30日時点で、この中枢は第2ラウンドの深い収束・再構築を続けています。機能を増やすためではなく、研究の真実が発見から公開までの間に静かに失われないことを、さらに厳しく証明するためです。

07 | 総合評価・比較システム

研究対象が増えると、各社の数十ページのレポートだけで横比較するのは難しくなります。

そこでkabugami.jpは、研究とは独立した総合評価システムを持っています。現在の正式版はV3.2で、研究そのものから切り離された後段の機能として位置づけられています。

先に点数をつけて、その点数に合う証拠を探すものではありません。完全な研究と統合が終わった後に、すでに形成された判断を比較可能な視点へ圧縮します。

現在は、おおむね次の八つの観点を使います。

1. 財務の耐久力と下方防御；
2. 競争優位と構造的な持続性；
3. 利益の質、キャッシュ転換、資本効率；
4. 事業構造、製品、顧客、主要依存関係；
5. バリュエーションと安全余地；
6. 資本配分と株主還元；
7. ガバナンス、所有構造、経営陣；
8. kabugami.jp独自の価格・技術構造。

重要なのは八つの項目名ではなく、その立場です。

スコアは完了した研究を圧縮するだけで、研究内容を逆向きに規定しません。

また、将来スコア方法が更新されても、過去のレポートと過去のスコアは当時のバージョンのまま保存されます。新しい物差しが出たからといって、古い判断を後から書き換えません。

08 | 研究からプロダクトへ：レポート、チャート、辞典、ユーザー接点

内部研究が複雑であっても、読者が内部システムを学ぶ必要はありません。

プロダクト層の役割は、深い研究を、段階的に理解できる形へ変換することです。

8.1 一社ごとの長期リサーチ記録

企業は単なる「一記事」ではなく、時間とともに更新される研究対象になります。

新しい正式リサーチ版は過去の研究を引き継ぎながら、新しい時点の判断を追加します。過去の版も残るため、企業だけでなくkabugami.jp自身の判断変化も追えるようになります。

8.2 Webレポート

公開レポートは、複雑な研究を読者が追える構造へ変換します。

表現を短くすることはできます。しかしページ数やデザインの都合で、重要な意味を消すことはできません。

8.3 チャート

公開チャートは理解のためにあります。内部検出方法をすべて開示するためではありません。

研究用チャートにはより深い観察情報を持たせ、公開用チャートは読者に必要なものへ絞ります。

8.4 投資研究用語辞典

辞典機能はすでに正式な能力として成立しています。

深い企業研究では、業界用語、会計、金融、工学、技術分析、kabugami.jp独自概念が繰り返し登場します。毎回本文で説明するとレポートが肥大化します。一方、説明がなければ新しい読者には届きません。

そこで重要概念を独立した長期知識ページへ分けます。本文の最初の登場箇所から自然にリンクし、必要な読者だけが深く入れる構造です。

8.5 システム級作品の入口 | Publication Gateway

個別銘柄には、現在の完全版へ入りながら過去の正式版も残す、安定したGatewayがあります。

kabugami.jpはこの考え方を、長期的なシステム級出版物にも拡張します。

本レポートのようなシステム全体像、将来の年次研究総覧、方法論の進化史、ガバナンスレポートなどは、それぞれ**Publication Gateway** | **システム級作品入口**を持てます。個別銘柄Gatewayと同じ製品・視覚ファミリーに属しますが、架空の銘柄コードとして扱うことはありません。

一つの長期作品には一つの安定した入口があります。大きな更新は新しいEditionとして同じPublication Timelineへ入り、中国語と日本語は一つのEditionの言語ビュー、HTMLとPDFは同じ内容の形式ビューとして扱います。

8.6 UIをどう漂流させないか

現在のkabugami.jp UIは意味の上では分離されています。**Researchが真実を決め、UIはその真実を人に届きやすくするだけです**。カード、章立て、要約、スコア表示などが、上流研究に「何を発見すべきか」を逆向きに命令することはできません。

一方、実装ではGateway、完全レポート、辞典、プライベート研究、ZEROなどが既存WordPressとSingle Report基盤を可能な限り共有します。分離して見せるためだけに、別プラグイン、別サーバー、別フロントエンドを増やしません。意味は独立して進化し、運用基盤は薄く保つという設計です。

本レポート日時点で、こうした不変部分は薄いUI Presentation Standardとして正式化されています。固定するのはアイデンティティ、階層、履歴、モバイル可用性、「UIはResearchを逆制約しない」といった原則であり、フォントサイズやカード寸法などの細部は将来も進化できます。

8.7 ユーザー向けAI接点

将来のWeb AI ButtonやiOSクライアントは、ユーザーが研究資産と対話する入口になる予定です。

ただし、2026年8月30日時点では明確に次段階の領域です。完成済みの機能としては扱いません。

09 | 研究の流通と価値化

従来の調査レポートは、書かれ、公開され、読まれ、その後ほとんど使われなくなることが多いものです。

kabugami.jpは、研究を別の形で扱える可能性を検討しています。

一つの研究が、後から発見され、引用され、保存され、共有され、議論され、その判断履歴自体に価値が生まれる状態です。

内部プロジェクト名はResearch Circulation。本レポートでは**研究の流通と価値化**と呼びます。

研究信用、公開履歴、コレクション、譲渡、過去判断の検証可能性、将来的なUSDC等による価値交換などを検討対象にしています。

ただし、2026年8月30日時点では、このプロジェクトは**責任者による明確なHOLD状態**です。設計や隔離された基礎はありますが、現在の最重要インフラ構築と資源を競わせていません。

魅力的な未来案だからといって、今すぐ作る必要はない。この優先順位の付け方自体が、現在のkabugami.jp統治の一部です。

10 | Web・物語・人格：なぜkabugami.jpは研究バックエンドだけではないのか

kabugami.jpには早い段階から二つのDNAがありました。

一つはResearch Intelligence | 研究知性。

もう一つはHuman Experience | 人間の体験です。

2026年初頭、『株神降臨』、神代、Zero、創世殿といった世界観が形成されました。Webサイトは、単に株式レポートを並べる場所ではなく、日本企業の歴史、産業、価格、市場での運命を、人が継続して読みたくなる形にする試みでもありました。

さらに「牧師／告解殿」という対話モジュールの実験も行われました。株式や損失、不安を抱えてサイトへ来たユーザーに対し、指標だけを返すのではなく、人間的な対話体験を提供できないかという発想です。

これはkabugami.jpを娯楽サービスにするためではありません。

むしろ、正しい研究も、適切な入口がなければ人に使われないという事実を示しています。

そのため現在は、研究バックエンドとユーザー体験を混ぜずに分離しつつ、最終的には再びつながる構造を目指しています。

11 | 全体統治・調整中枢

kabugami.jpが一つの研究フローだけで動いていた時期には、全体の「管理層」は不要でした。

しかし、厳密研究、AI自由研究、市場事実、スコア、辞典、Web、将来クライアント、歴史、災害復旧が並行するようになると、新しい問いが生まれます。

今、全体として何が動いているのか。

そこで全体統治・調整中枢が生まれました。内部名称はStewardです。

銘柄研究はしません。各モジュールの権限を奪うこともしません。研究組織の運営管理に近い役割です。

- ・どのプロジェクトが実際に進んでいるかを見る；
- ・正常な待機と、事故的な停止を区別する；
- ・既に承認され、低リスクで可逆な範囲なら事故停止を再開する；
- ・実行資源が不足するときは、全体価値に応じて優先順位を動的に変える；
- ・空いている実行能力を無駄にしない；
- ・責任者が設定したHOLD、実運用、資金、不可逆操作等のゲートを越えない；
- ・古い統治情報が残り続け、後の復旧時に誤った地図として読まれることを防ぐ。

2026年8月30日時点では、動的な資源配分、リソース優先順位による待機（内部表記：RESOURCE-PARKED）という状態、災害復旧ワークストリームが正式な統治記憶に入っています。

kabugami.jpを長期的に見る読者にとって、この機能の価値は明確です。kabugami.jpは「そのチャットで誰かが覚えていること」に依存する状態から、複数プロジェクトをまたいで方向を維持する管理記憶を持つ状態へ進んでいます。

12 | 長期記憶と災害復旧

GitHub上のコードだけを復元しても、kabugami.jp全体は復元できません。

現在のkabugami.jpの背後には、2021年から2026年までのおよそ5年間を対象とする研究成長史があり、その復元と整理が進められています。

ただし、歴史をきれいに见せるために事実を作りません。2021-2022年の思想面には現在も一次資料の欠落があります。一方、少なくとも2022年11月以降については、後の会計・証券資料から実際の投資活動が継続していたことを遡って確認できます。

12.1 歴史記憶・成長記録

保存するのは、コードの場所だけではありません。

- ・当時なぜそう考えたのか；
- ・どの銘柄が方法論の変更を引き起こしたのか；
- ・どの理論が後に根本的な誤りと分かったのか；
- ・誰が最初にアイデアを出し、誰が拡張し、誰が修正し、誰が最終決定したのか；
- ・何が残り、何が降格され、何が廃止されたのか；
- ・AIが説明役から、研究者、批判者、設計参加者、統治支援へどう変わったのか。

こうした情報が、組織としての「記憶」になります。

12.2 災害復旧・システム再構築

もう一方は、より現実的な復旧能力です。

将来、AIプラットフォーム、PC、Webサイト、GitHub、WordPress、データ環境の一部が失われた場合、どこから何を戻し、何を検証してシステムを再構築するか。

コード、レポート源、Web、データ、バックアップ、資格情報の所在メタデータ、復旧証明などが対象になります。ただし、パスワード、SSH秘密鍵、API SecretそのものをGitへ置くことはありません。

二つを合わせてkabugami.jpが目指すのは、単なる「バックアップ済み」ではありません。

ツールが変わっても、研究能力、判断の理由、重要資産を再構築できる状態。

13 | ある企業がkabugami.jpに入ったとき、完全な研究は実際にどう進むのか

この章が、システム全体を理解するうえで最も重要です。

ここまでの章では、市場事実、研究、証拠統合、Score、プロダクト、ガバナンス、長期記憶をそれぞれ説明してきました。ここではモジュールを一つずつ紹介するのをやめ、日本市場にある普通の上場企業一社を想定し、その企業をめぐってkabugami.jp全体を一度動かします。

見るべきものは「AIがどう文章を書くか」ではありません。一社が数千銘柄の一つから、検証でき、比較でき、更新でき、引き継げる長期研究資産へどう変わるかです。

以下は2026年8月30日時点ですでに形成されている研究の主幹と、現在接続・強化を続けている能力を一つの流れとして示したものです。市場事実基盤、全市場発見、公開側の研究発見トレーサビリティ、流通・コレクションなどはなお構築・検証中であり、本章は「今日すでにどう動くか」と「完成形へどう収束しているか」の両方を区別して描きます。

01

研究視野へ

日本市場全体から研究候補として現れる

02

事実座標を作る

長期履歴・現在事実・時間位置を先に確認

03

研究役割を分ける

企業・価格・自由探索・体系的 연구를並行

04

発見を残す

重要な研究点を文章へ潰す前に保存

05

矛盾と反証を残す

一致しない事実と説明を同時に保持

06

判断へ統合

証拠・因果・未知・反転条件を組み立てる

07

比較へ

完全研究の後でScoreによる横比較へ

08

人向けに翻訳

レポート・図表・辞典・Gateway・PDFへ

09

Editionを凍結

その時点で何を知り、なぜ判断したかを保存

10

同じ生命線で更新

新しい事実と価格履歴を過去の理解へ接続

11

流通関係へ

閲覧・引用・収集・共有は研究真実を変えない

12

システムを教育

再利用可能な新問題が方法自体を進化させる

現実 → 発見 → 研究 → 反証 → 統合 → 表現 → 時間 → 再び現実へ

13.1 第1幕 | 数千銘柄の一つが「研究すべき問い」になる

完全研究の最初には、意外に重要な問いがあります。なぜ今、限られた研究時間をこの会社を使うのか。

研究対象を人の記憶や慣れだけで選ぶと、結局は知っている企業を繰り返し見て、市場で本当に変化している場所を見落としします。そのためkabugami.jpは、「研究対象を発見すること」自体を独立能力にしようとしています。目的は万能の買いシグナルではなく、日本市場全体で起きている**研究する価値のある変化**を見つけることです。

その変化は、長期価格構造の異常、評価と事業品質の珍しい組み合わせ、キャッシュフローや資本配分・株主政策の変化、業界環境と企業ポジションのずれ、過去の判断を再び開くべき企業イベントなど、さまざまな方向から現れます。

「研究価値がある」と「買う価値がある」は同じではありません。

発見層は問題を研究机へ運ぶところまで。取引結論を先取りしません。最初から答えを探すのではなく、「今、答える価値のある問い」を選ぶところから始まります。

13.2 第2幕 | 解釈より先に、共通の事実座標を作る

企業が研究対象になると、すぐ物語を作るのではなく、異なる研究者ができるだけ同じ現実を立てるようにします。

一つ目は**時間座標**です。今日の株価や指標を孤立した点として見ず、長年の価格履歴のどこにいるのか、日・週・月の異なる時間軸が同じ歴史のどの部分を見ているのかを確認します。単独では「上昇」にしか見えないものも、長期履歴に戻すと、回復、再評価、反発、あるいは一時的なノイズかもしれません。

二つ目は**検証可能な企業事実**です。何を売っているか、顧客は誰か、利益とキャッシュはどう生まれるか、資本はどこへ使われるか、財務余力はどれほどか、経営者の言葉と行動は一致しているか、業界や規制に何が起こっているか。できる限り一次的・追跡可能な材料へ戻します。

そして重要なのが、**分からないものを分からないまま残す**ことです。数字の定義が揃わない、事業寄与を切り分けられない、政策影響がまだ発現していない、噂に信頼できる出所がない。このような項目を、文章をきれいにするためだけに埋めません。

市場事実基盤は結論ではなく、研究者が立つ共通の床です。その上で初めて、異なる解釈が意味を持ちます。

13.3 第3幕 | 同じ会社を、意図的に別の「目」で見る

一つの役割が一つの手順で全てを研究すると、速くても同じ偏りを増幅しやすくなります。そこで kabugami.jp は研究責任を分け、いったん独立に考えさせ、後段で統合します。

企業ファンダメンタル研究は企業機械そのものを見ます。何で稼ぐのか、顧客がなぜ払うのか、競争優位は構造的か一時的か、利益はキャッシュへ戻るか、資本はどこへ配分されるか、財務余力はどれほどか、経営者の宣言と資本配分行動は一致しているか、成長は価値を作っているのか単に規模を増やしているだけなのかを追います。

価格・市場構造研究は別の規律を持ちます。企業ストーリーを一度脇に置き、価格履歴自体を独立証人として扱います。長期下落、回復、滞在、重心移動、複数時間軸の関係を見ます。企業研究を置き換えるためではなく、「良い会社に見える」という物語で価格判断が汚染されないためです。

AI自由研究は逆に、テンプレートにない問いを追う責任を持ちます。主要顧客、買収統合、認証、在庫、原材料政策、隠れ資産、競合の行動、海外ニッチ市場、経営者の言葉の変化など、最初は分類不能でも重要なかもしれない線を追えます。

体系的な厳密研究は別の危険を抑えます。自由研究は面白い物語に引かれ、退屈でも致命的な項目を飛ばしがちです。そこで企業品質、財務、ガバナンス、産業、リスク、資本配分などの基本領域を落とさないよう補います。

目的は「AIを何人も使うこと」ではありません。**異なる失敗モードを互いに打ち消す**ことです。

13.4 第4幕 | 最初に残すのは文章ではなく「研究発見」

ここは、直近の再構築で特に重要になった部分です。

深い研究では、一度に数十個の意味ある発見が生まれます。顧客依存、会計上の変化、設備投資、ガバナンス行動、価格構造、反証、将来確認すべき条件などです。従来型の文章制作では、それらを直接レポートへ流し込み、読みやすさや長さのために何度も圧縮しがちです。

しかし、文章が短くなることと、研究が消えてよいことは別です。

実際の試験でも、研究段階では多数の有効な研究点が存在したのに、最終表現では一部しか見えなくなるリスクが明確になりました。この経験が、研究統合、公開トレーサビリティ、レポート構造の再構築を直接促しました。

そのため完全な流れでは、重要発見をまず研究資産として残し、その後で本文、図表、リスク、未解決問題、将来検証点へ役割を分けます。

現在さらに強化しているのは、本文の読みやすさを壊さずに、必要な読者がより完全な**研究発見インデックス**へ進み、本文の重要判断と元発見を相互にたどれる状態です。

つまり、レポートは研究の表現であって、研究の容量上限ではありません。

13.5 第5幕 | 研究同士が矛盾しても、急いで一つに丸めない

深く調べるほど、全てが同じ方向へ揃うとは限りません。

割安だがキャッシュの質が弱い。業界は伸びるが競争位置は悪化している。価格構造は改善しているが事業確認はまだない。財務は安全だが資本配分は低効率。株主還元を掲げながら説明しにくい投資を続ける。短期利益は強いが在庫・為替・原材料など一時的要因かもしれない。

「結論を書く」衝動は、早く強気・弱気、良い会社・悪い会社へ分類したくなります。しかし研究資産の価値は、こうした張力を消さずに残すことにあります。

重要判断には、支持事実、反証、別の合理的説明、重要な未知、そして**どんな新事実が出れば今日の判断を変えるのか**を持たせます。

反転条件のない判断は時間とともに信念へ変わりやすい。反転条件を持つ判断は、将来の現実によって検証できます。

13.6 第6幕 | 統合は「皆の要約」ではなく、引き継げる判断構造を作る

独立した研究がそろって初めて、研究統合・証拠中枢が本格的に働きます。

四つの文章を一つへ縮めるのではなく、何が事実で何が解釈か、似た二つの発見は本当に同じか、矛盾する判断は同時成立できるか、因果関係に飛躍はないか、リスクは現実化済みか形成中か単なる可能性か、どの未知が最終判断を大きく左右するかを整理します。

一社はここで、記事より深い構造を持ち始めます。

- ・ **事実**：現在検証できる現実；
- ・ **解釈**：事実をどう理解し、なぜそう考えるか；
- ・ **支持と反証**：判断が成立する理由と壊れる可能性；
- ・ **因果**：企業価値や市場状態を本当に動かし得る関係；
- ・ **重要な未知**：現時点で誠実に答えられない問い；
- ・ **反転条件**：将来どの証拠で見方を変えるか；
- ・ **正式判断**：以上を踏まえ、その時点で最も妥当な理解。

ここでいう正式判断は「永遠の真理」ではなく、そのEdition、その時点の正式な理解です。

13.7 第7幕 | Scoreは最後に来る。比較が研究を逆定義してはいけないから

完全な統合が終わってから、V3.2総合評価・比較システムが入ります。

Scoreは研究を置き換えるものではなく、複雑な判断を安定した比較視点へ圧縮するものです。多くの企業を横に並べたとき、品質、評価、リスク、研究優先度などを見比べやすくします。

しかし順番を逆にすると、研究はすぐスコア表の奴隷になります。スコアに不要な発見を無視し、必要な項目だけを過大に探すようになるからです。

研究が先に自分の真実を形成し、Scoreが後から研究を消費する。Scoreが進化しても、過去の研究事実を逆向きに書き換えない。

将来Scoreの方法が変わっても、過去Editionが当時どの評価体系で読まれていたかは履歴として残ります。

13.8 第8幕 | 内部の複雑さを、人が本当に読めるプロダクトへ翻訳する

この段階で内部には、一つのWeb記事をはるかに超える情報があります。しかし、それを全部第一画面へ出すのは良い透明性ではありません。

そこで行うのは「削って結論だけにする」ことではなく、深さを段階化することです。

初めての読者はGatewayと短い概要から入る。さらに読みたい人は完全レポートへ進む。価格履歴は図表で理解する。難しい言葉は投資研究辞典へつなぐ。オフラインで保存したい人はReading Edition PDFを使う。将来、より完全な研究発見を追いたい読者には、その下の発見・証拠層への導線を用意する。

これが「入口は簡単、内部は深い」という設計です。

一方で、透明性は内部手法を全て複製可能な形で公開することを意味しません。守るべき理論や内部推論は守ってよい。しかし、その保護を事実、リスク、反証、不確実性まで隠す理由にはしません。読者が理解すべきなのは、内部実装ではなく、**なぜその判断なのか、どんな条件なら間違いになるのか**です。

13.9 第9幕 | 公開時、その時点の研究をEditionとして凍結する

公開は、Webページを最新内容へ上書きして終わる作業ではありません。

完成した研究Editionは、その時点の情報環境を保存します。何を知っていたか、何がUNKNOWNだったか、どの世代の研究・Scoreを使ったか、どんな判断をし、どんなリスクと反転条件を持っていたか。

投資研究は当時の情報環境へ戻して初めて公平に評価できます。数年後の知識で過去を見れば、「最初から分かっていたはず」という後知恵が簡単に入り込みます。Editionを凍結するのは、その改ざんを防ぐためです。

次の正式研究が生まれると、新版がCurrentになり、旧版はGatewayのTimelineに残ります。旧版は消されません。

UI修正、リンク修正、言語追加、Reading PDFやCollector投影の追加だけなら研究Editionは増えません。研究意味そのものが正式に更新されたときにだけ、新Editionになります。

13.10 第10幕 | 次の研究は「また一から作文する」のではなく、同じ研究生命線で続く

公開後も企業はシステムから消えません。

新しい決算、受注、政策、顧客変化、資本配分、業界ショック、新しい価格履歴が加わります。次の研究は検索をゼロからやり直す前に、以前どこまで理解していたかを知る必要があります。

そこで更新では、古い判断のどれが生きているか、新事実で強まった証拠は何か、反転条件は発動したか、過去のUNKNOWNに答えが出たか、重要性を失った論点は何か、企業に本当の構造変化が起きたかを確認します。

こうして研究に「記憶」が生まれます。

長期的には、一社は互いに知らないPDFの山ではなく、過去の理解を引き継ぎながら成長する研究生命線を持ちます。

13.11 第11幕 | 閲覧・引用・収集は、研究真実の外側にある関係層

公開後に一度読まれて埋もれるだけでは、研究はまだ長期知識資産になりきれていません。

そのため研究流通・価値循環の方向では、同じEditionが閲覧、引用、収集、共有、議論され、将来は検証可能な参加履歴を持てる形を目指しています。

ただし境界は明確です。**関係層が第二の研究真実を作ってはいけません。**

Reading EditionとCollector's Editionの研究本文は同じです。Collectorが得るのはEdition、時間、出所、収集関係の証明であり、非公開の「上位判断」ではありません。また将来どんな技術媒体を使うとしても、技術資産のために研究を装飾するのではなく、研究作品の来歴と関係を支えるために使うべきです。

この能力はなお構築・検証中です。したがって現在の公開物では、未来のコレクションや収益モデルを完成済み事業として扱いません。

13.12 第12幕 | 最も重要な循環：企業が逆にkabugami.jpを変える

何社研究しても、永遠に同じ質問、同じ分類、同じ表現しか使わないなら、それは高度な自動化ラインにすぎません。

kabugami.jpが目指すのは、現実の企業が研究システムを逆に教育する循環です。

一つの企業研究が、従来見ていなかった因果関係を発見するかもしれない。価格履歴が旧技術枠組みでは説明できない現象を示すかもしれない。多数の研究発見が編集段階で失われた経験が、研究と記事の間に新しい保真機構を要求するかもしれない。新しい産業概念が繰り返し現れれば辞典へ入る。Scoreが重要な違いを捉え続けられなければ独立して進化する。全市場研究が同じデータ欠損へ繰り返しぶつかれば、市場事実基盤そのものを改善する必要があります。

ただし、特殊例に出会うたび新ルールを足すわけではありません。問題が再利用可能で、境界が明確で、将来研究を本当に改善すると確認できたときだけ長期能力へ昇格させます。それ以外は企業固有の経験として保存します。

全体ガバナンスと歴史記憶は、「何を変えたか」だけでなく、「なぜ現実が今回の変更を必要としたのか」を残す役割も持ちます。

だからkabugami.jpは、企業を投入してレポートを吐き出すラインを目指していません。現実を研究し、判断を保存し、反証を受け、現実によって自分自身も変わる学習システムを目指しています。

13.13 読者が最後に見る体験は、むしろ簡単であるべき

ここまでの十二幕を並べると非常に複雑に見えます。しかし、その複雑さをユーザーへ背負わせる必要はありません。

一般の読者にとっては、最終体験はシンプルでよいのです。

1. ホームや検索で企業を見つける；
2. 安定したGatewayへ入り、Currentと過去研究の位置を知る；
3. 短い要約を読み、深く読むか決める；
4. 完全レポートと図表へ進む；

5. 知らない概念は辞典で理解する；
6. 必要なら研究発見、過去Edition、将来のAI対話へ深く入る；
7. 数か月・数年後に戻っても、その後何が変わったかを追える。

複雑な仕事は背後で行われます。公開プロダクトの役割は、複雑な研究を薄くすることではなく、そこへ入りやすくすることです。

したがって完全研究の最も価値ある成果は、「良い記事が一本増えた」ことではありません。

その企業がkabugami.jpの中に、時間とともに成長できる研究生命ファイルを持ったことです。

14 | 2026年8月30日時点で、どこまで構築できているのか

以下では、「既に使える能力」「現在強化中」「将来領域」を意図的に分けます。設計図を完成済みの現実として書かないためです。

CURRENT SYSTEM STATE

完成/未完成の二択ではなく、成熟度の異なる長期能力群。

2

卒業済み能力

Score V3.2・投資研究辞典

4

形成済み / 稼働中

企業研究・技術研究・公開・ガバナンス

3

中核構築 / 深化

AI自由研究・研究中枢・市場事実

2

待機 / 将来選択肢

クライアント・研究流通

2

低ウェイト長期基盤

歴史記憶・災害復旧

能力	現在の状態	すでに存在するもの	主な未完了部分
企業ファンダメンタル深掘り研究	成立・継続進化	深い企業研究、証拠・因果分析	スケール、企業間再利用、長期追跡の質をさらに向上
価格・市場構造研究	成立・深化中	独立した技術研究、長期価格史、多時間軸観察	より完全な市場事実基盤との連携
AI自由研究レーン	成立・深い監査中	独立自由発見型リサーチ、クロスレーン発見	現在の収束監査を完了し、長期的にルールへ同化しないことを証明
厳密研究／研究統合中枢	コア構築中	研究→統合→公開の一貫チェーン、持続状態	第2ラウンド収束、新銘柄エンド・ツアー・エンド、最終卒業証明
総合評価 V3.2	卒業済み能力	八視点の後段評価、バージョン履歴維持	通常運用へ移行。独立開発主線ではない
市場事実・チャート基盤	構築中	多時間軸チャート、履歴アダプタ、スクリーニング基盤	本番級全市場事実、出所・許諾・品質、本格的な全市場運用後の検証
投資研究用語辞典	卒業済み能力	概念ID、三言語名称、解説、企業適用構造	イベント駆動保守。作業を作るための開発はしない
Webレポート・公開	成立・継続強化	単一企業の正式レポート、WordPress、PDF等の公開チェーン	Canonical最終卒業後にUI系と最短整合
ユーザーAI接点／クライアント	基盤卒業待ち	独立したクリーンな領域と境界	Canonical卒業後に最終互換・エンド・ツアー・エンド
研究流通・価値化	責任者判断による意図的な停止	設計、隔離された基礎、将来方向	責任者の明示的再開待ち

kabugami.jp・SYSTEM OVERVIEW・2026.08.30・R1

30

能力	現在の状態	すでに存在するもの	主な未完了部分
全体統治・調整	稼働中	プロジェクト地図、動的資源配分、限定限定的な自動再開、ゲート管理	重要な新統治事実を吸収し、状態の古化を防ぐ
歴史記憶・成長記録	正式能力／低優先度背景	2021-2026考古枠組み、証拠登録、最終歴史成果物の方向	資源があるときに重要な新歴史のみ吸収
災害復旧・再構築	正式登録／低優先度背景	バックアップ、復旧範囲、資源・資格情報メタデータ原則	復旧証明、Web・データ・主要資産の完全な復旧閉ループ

この表から分かるのは、kabugami.jpにはすでに実際に働く能力が複数存在する一方、まだ「基盤を急速に成熟させている段階」だということです。

15 | 成熟したkabugami.jpはどのような姿になるのか

成熟したkabugami.jpでは、日本市場の事実データが継続的に共通基盤へ入り続けます。

人が毎回銘柄コードを入力しなくても、システムが日本市場数千社の中から研究価値のある変化を能動的に見つけます。

複数のAI研究役割が、企業、産業、財務、価格履歴、例外的な問題を別方向から調べます。自由研究はテンプレートに潰されず、厳密研究は重要な盲点を残しません。

研究が終わると、証拠、反証、矛盾、未知、因果関係が長期記録へ入ります。スコアは比較のための圧縮ビューを提供しますが、研究そのものを置き換えません。

一般ユーザーがWebで見るのは、分かりやすいレポート、実在するチャート、クリックできる概念解説、自然なAI対話です。専門研究層には、それよりはるかに多くの証拠と深度が残ります。

企業は一つの静的記事ではなく、「研究の生命記録」を持つようになります。新しい情報が来るたびに更新され、過去の判断も保存されます。

研究は発見、引用、保存、共有、議論され、将来は新しい価値交換につながる可能性があります。

AIモデルは交換できます。Webデザインも変えられます。あるモジュールを一から再構築することもできます。それでも、蓄積された研究、歴史、証拠関係、方法論が失われない状態を目指します。

最終的なkabugami.jpは、単なる銘柄選定ツールではありません。

学び続け、蓄積し続け、自分がなぜ変化したのかを説明できる、日本株リサーチ基盤です。

16 | 何が長期価値になり得るのか

kabugami.jpの長期価値を見るうえで重要なのは、現在のコード量ではありません。時間とともに何が複利化するかです。

16.1 リサーチ資産

深い企業研究、重要な反証、長期更新は、次回研究の出発点になります。研究費が毎回消えるのではなく、次の研究を速く、深くする資産へ変わります。

16.2 市場事実・データ関係資産

重要なのはCSVの件数ではありません。

出所が追えるか。更新できるか。企業研究、価格構造、過去正式リサーチ版と安定してつながるか。データの価値は、その関係性にあります。

16.3 方法資産

企業研究、価格構造研究、全市場発見、証拠統合、スコアリング、知識解説が、独立して進化できる能力になりつつあります。

16.4 Human × AIの組織資産

より模倣しにくいのは、人間とAIがどう分業し、どう修正し、AIが「手順を守るだけの研究者」に退化することをどう防ぐかという運営知識です。

壁は一つのPromptではなく、数年分の組織方法と失敗免疫の蓄積かもしれません。

16.5 歴史資産

現在の正解だけを保存するシステムは、過去の失敗を何度も繰り返します。

kabugami.jpは、否定された理論、採用しなかった製品方向、修正の理由も保存し始めています。将来、これらはあるバージョンのコード以上に価値を持つ可能性があります。

16.6 プロダクト・ネットワーク資産

レポート、Gateway、辞典、将来AI接点、研究流通がつながると、個々の記事は孤立したコンテンツではなく、互いに参照し合う知識ネットワークになります。

16.7 最も重要なのは「接続の複利」

個々のモジュールだけを見れば、どれもある程度は模倣できます。

難しいのは、市場事実から発見へ、発見から多役割研究へ、研究から証拠統合へ、統合からスコアとレポートへ、レポートから企業の長期記録へ、そして歴史から次世代の研究方法へつながる一連の関係を作ることです。

kabugami.jpの長期価値は、各要素そのものよりも、それらがつながった後の複利から生まれると考えています。

17 | 現在のリスク、制約、未解決事項

公開のシステムレポートで、未来の魅力だけを書くべきではありません。

kabugami.jpには現在も明確なリスクと未完了事項があります。

17.1 依然として責任者への依存が大きい

重要判断、方向選択、最終承認の多くに責任者が直接関与しています。経験を継承可能なルールへ変換する作業は進んでいますが、低依存で運用できる段階にはまだ達していません。

17.2 AIには幻覚だけでなく、認知劣化リスクがある

AIは誤情報を生成するだけではありません。手順を満たすために研究を早く止める、文章を整えるために矛盾を消す、スコアに合わせて証拠を探す、といった静かな失敗があります。

kabugami.jpはそれを前提に設計を進めていますが、ルールがあるからリスクが消えるわけではありません。

17.3 市場事実基盤は本番完成前

日本市場全体の長期データ、コーポレートアクション、利用許諾、品質、復旧能力は、引き続き完成させる必要があります。

17.4 コア研究中枢は第2ラウンドの収束中

Canonicalにはすでに一貫したアーキテクチャと実行能力がありますが、本レポート日時点では、さらに深い監査と新銘柄での本番証明が残っています。「最終卒業済み」とは表現しません。

17.5 ユーザー側の完成は次段階

Webレポートはすでに存在しますが、より完全なAI対話、App、ユーザーワークフローは、コア研究基盤が安定した後に整合させる計画です。

17.6 商業モデルは検証途中

研究流通、デジタル決済、保存・所有、研究信用といった方向には可能性があります。しかし現在の成熟収益モデルとしては扱っていません。

17.7 知的財産保護と透明性の両立

公開読者には、何が価値なのかを理解できるだけの説明が必要です。一方で、研究手法をそのまま再構築できる詳細まで公開すると、長期的な保護が弱くなります。

そのため、原則、証拠、結論、価値を理解するための高位メカニズムは公開し、再現可能な閾値、組み合わせ、内部状態、ルーティング詳細は保護します。

17.8 歴史は完全ではない

2021-2022年には一次資料の欠落があります。kabugami.jpは後知恵で穴を埋めず、GAPとして保存します。

「分からないことを分からないまま残す」ことも、長期統治の品質だと考えています。

18 | 結語：一人の研究習慣から、継承できるシステムへ

現在のkabugami.jpを見ると、多数のシステムが最初から計画されていたように見えるかもしれません。

実際には、ほとんどが現実の問題から生まれました。

データが十分に信頼できない。だから市場事実基盤が必要になった。

好きな銘柄だけを見ると視野が偏る。だから全市場発見が必要になった。

AIがルールに慣れすぎると研究の自由が失われる。だから自由研究レーンを残した。

価値ある発見が要約で消える。だから研究統合・証拠中枢を作った。

スコアが研究を逆に縛る。だからスコアを研究後へ移した。

公開章立てが思考の上限になる。だから「公開形式は現実の大きさを決めない」と明文化した。

難しい概念を毎回説明するとレポートが壊れる。だから用語辞典を作った。

プロジェクトが増え、実行資源に限られる。だから全体統治・調整中枢が必要になった。

AIは忘れ、ツールは変わる。だから約5年の歴史を復元し、災害復旧を正式な能力として扱い始めた。

kabugami.jpの長期的な特徴は、完成された設計図を守ることはありません。

現実の研究で問題が生じたとき、その問題の解決策を、次回も使える能力へ変換していくことです。

現在も完成ではありません。

しかし、一人の日本株研究習慣から始まったものが、人間、AI、証拠、データ、プロダクト、歴史が共同で働くシステムへ進んできたことは、すでに確認できます。

次に重要なのは、新しい名前を増やすことはありません。

すでに存在する能力を安定して連携させ、より大きな市場、より長い時間、より多くの実ユーザーの前でも、その価値が成立することを証明することです。

kabugami.jp

お問い合わせ | Contact

kabugami.jp

Developed and operated by JNJLEE Co., Ltd. / 株式会社JNJLEE

Representative / Contact

Raphael Lee (李 奮)

Email

raphael@jnlee.co.jp

Website

<https://kabugami.jp/>

所在地

〒106-0032

東京都港区六本木7丁目7番7号

トライセブンロップンギ 8階

8F TRI-SEVEN ROPPONGI

7-7-7 Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032, Japan

本レポートは転送・保存される可能性があります。どの経路で本資料をご覧になった場合でも、kabugami.jp、JNJLEE、研究、協業、その他の長期的な関係についてご関心があれば、上記Webサイトまたはメールアドレスから直接ご連絡ください。

資料・検証について

本レポートは2026年8月30日時点のkabugami.jpの現行状態を基準とし、主に以下を参照しています。

- kabugami.jpの現行GitHub main、正式標準、状態ファイル、直近コミット；
- kabugami.jp 歴史進化アーカイブのWorking Ledger、最終成果物契約、証拠登録；
- 研究統合システム、市場構造・市場事実基盤、V3.2総合評価システム、用語辞典、ユーザー接点基盤、Stewardの現行正式状態；
- 2023-2026に回収された一次会話、メール、研究レポート、プロダクト資料。

kabugami.jpのコア研究資産を保護するため、本資料では各能力の目的、関係、現在状態、価値を理解するために必要な高位メカニズムを説明する一方、内部研究手法を直接再構築できる閾値、検出組み合わせ、状態構造、ルーティング詳細などは公開していません。

一次資料で裏付けられない歴史部分は、後知恵で補わず欠落として扱っています。

Version: 2026.08.30 / Japanese Edition

Canonical Website: kabugami.jp